



幻想異郷伝

体験版

DOJIN R18 成人向け 18歳未満の購入・閲覧禁止



これはもう一つの幻想郷の物語

目次

あとがき	8 5 P
第四章 異郷巡り	6 0 P
第三章 覆水不返	6 P
幕間	5 P

【幕間】

首を絞める感触を今でも覚えている。

指先に食い込む筋と血管の肌触り。脈はどんどん速くなり、彼女の顔面は赤茶けていく。

「っ……っっ?!」

両腕を掴まれた。力づくで腕を引き剥がさんと、力を込められる。歯を食いしばり、それを押さえ込む。爪が腕に食い込むとも、そこから黒い瘴気のようなものが出ようともしらすら目の前の者を殺そうと力を込める。

「……な、なんで……っ!」

白い泡を口の端から飛ばしながら、充血した瞳がこちらを射抜く。

「……私は、お前の為に……っ!!」

「黙れ! 黙れ黙れ黙れ!!」

声をかき消すように叫び、さらに力を込める。全身で身体を押さえ込み、首を握り潰さんばかりに指を食い込ませる。

「私は——私は!!」

やがて壊れたラジカセのように音は消えていき、力を込めすぎた指先に、ごきり、と嫌な感触が響く。

それでもまだ首を絞め続けた。今にも息を吹き返し、自分を襲うと心から信じる。明確な殺意を持っていた指は、もうただの惰性として首に食い込み、破れた皮膚から血がだらりと流れ出る。

「うあ」

呆けた声を出し、ようやく指を止めた。

鼓動は爆発しそうなほどで、勢いよく回る血液にくらからず。心臓では内側から針で刺されているような痛みがずっと続いている。

「——神奈子様?」

あるいは、彼女が死んだことを一番信じなくなったのは他ならぬ自分だったのかもしれない。

震える両手を見下ろした。

割れた爪先に血がこびり付き、白い手首には黒い痣が残っていた。

【幕間】

### 【第三章 覆水不返】

世界は赤で染まっていた。それも血のよう瑞々しさも無ければ、染め物のような鮮やかさも無い。例えるなら、五十の年月をかけて鉄柱にまとわりついた赤さびの色とでも言うべきか。

「……鼻がもげそうだ」

袖で鼻を押えたナズーリンのつぶやきに、霊夢も小さく鼻を鳴らす。砂ホコリに混じり、異臭が鼻を走り抜ける。炎天下で三日放置した死肉を合成ゴムと一緒にスプで煮込んだならばこんな匂いになるのかもしれない。

「未来では二つの大改革がありました」

赤い大地を睥睨しながら、早苗はそう切り出した。

「一つは八坂神奈子による技術発展。彼女が叡智を結集させて生み出したエネルギー発生装置『八坂機関』は今まで人間が作り出したどんなエネルギーよりも効率的なものでした」

早苗の手の平の上に浮かび上がる青白い幻影。円柱の

形をしたそれが、八坂機関なる装置なのだろう。機械の知識に乏しい霊夢でも極小の部品からなるそれは、気が遠くなるほどの理論と発想を重ねて作られたものだと言える。

合掌するように早苗の両手が機関を包む。瞬間、世界が暗転し、巨大な建造物が立ち並ぶ都市へと変わった。「ここは八坂機関によって発展した街。幻想郷の一つの姿です」

「なによこの……人の数」

呆然とつぶやくアリスに、霊夢も頬を引き攣らせて共感の意を示す。そこは天を突くような塔が立ち並ぶ世界だった。山よりも高いのではないかと思う塔には無数の窓があり、その中では人々が何の感慨もない顔で生活している。

「家、なのよね？ これ」

「ビルと言います。まあ五百メートルはありますね」  
眉を潜めて霊夢は世界を観察する。幻想郷が持っていたかつての牧歌的な姿はどこにもなく、せわしなく動き回る無数の人々に頭痛さえ覚える。街路に植えられた草木はまったくの等間隔に配置され、街角に咲いていた小

### 【第三章 覆水不返】

さな雑草の花はゴミ収集の職員にむしり取られた。

巨大な船が空を飛んでいる。

その側面に映し出されたスクリーン。さらに街頭の全  
てのモニターが瞬時に切り替わり一人の女性の姿を映し  
出した。

「八坂、神奈子」

戦神、八坂神奈子はモニターの中で軽く手を振って見  
せる。それだけで人間たちは熱に浮かされたように小躍  
りする。まさに世界の支配者と言わんばかりに、人々か  
ら賞賛の嵐を受ける神奈子。

それは恐らくは神奈子がずっと願っていた光景。

「もはや幻想郷は外の世界すら越えた技術を確立しまし  
た。外の世界の人々はそんな夢の世界を思い描き、自ら  
幻想郷へ向かおうとする程です。その内に内外を分ける  
境界は曖昧になり、その役目を終える」

無数に立ち並ぶ商店にそこから中から聞こえるアイドル  
たちの自己アピール。自動販売機にコインを入れた男が  
機械に札を言われた。車輪のない鉄の馬車は空を走り、  
完璧に統制された速度と車間距離によって渋滞すら起こ  
さない。

「もはや人はエネルギー問題に苦しむ必要は無く、湯水  
のように資源を使い、技術革新に勤しむことができまし  
た。生活は安定し人口は増え、歴史にも類を見ない発展  
が続きました。人口増加曲線、見てみませんか？」

「なら、妖怪は!? 妖怪はどうなったのですか!?!」

白蓮の問いに早苗は目を瞑り、手を叩く。

暗転。

再び暗い闇の宇宙に放り出される。この感覚にも少し  
慣れてきたことが、逆に不快だった。

「もう一つの改革。それは聖白蓮による妖怪の悟り境地  
への到達、すなわち妖怪は人間に拠らずとも自己確立で  
きるようになったこと」

「——それは!」

声を荒げ身を乗り出す白蓮。白蓮の悲願。妖怪を救済。

それが未来の自身の手で行えたということに興奮を抑え  
きれないようだ。

光が広がり、世界が開ける。

そこは先ほどの都会とは対照的な雰囲気を持つ街だっ  
た。のんびりと花々に水をかける少女。道を駆け回る妖  
精。大きな声で挨拶を返す山彦。空に行く天狗たち。

穏やかな表情の彼女らの傍には人間の姿はない。

「ああ……これが」

感極まったように声を震わす白蓮。自らが思い描いて理想の世界がそこにある。その事実には涙腺を緩ませる。

「白蓮。やったんだね」

ムラサに支えられ、白蓮は何度も頷く。それに対し、ナズーリンの表情は固い。

「これによってもはや妖怪は人を必要としなくなった。自身で自身を確立し、その超常的な力を振るうことができる。その結果、もう彼らは人を襲う必要はなくなつた」

おどけるように腕を広げ、早苗は霊夢を流し見る。

「我ら巫女の退治仕事もなくなり、これにてお役御免というところまで来ました。退治屋は武器を手離し、手に職を持つことに。これにて人妖の時代は新たな地平へ」

「……………」

白蓮もアリスもムラサも、世界の未来をじっと見つめている。その瞳の中には輝かしい将来への希望がある。

確かにこの世界は素晴らしい。人間も妖怪もそれぞれ道を歩み、生を謳歌している。妖怪の恐怖に眠れぬ夜を過ごしてきた人々から見れば、まさに楽園だ。

だが、なぜだろう。

小骨のような違和感が胸に引つかかる。

これでいいのか？

何かが間違っていないか？

それとも〈これ〉が正解なのか？

「それで、どうなつたんだ？」

ナズーリンが問う。その時、わずかに早苗の口が歪むのを霊夢は見た。

「ふりだしに戻る、ですよ」

「——え？」

白蓮の呆けた声の残響を残し、再び視界が暗転する。

「うっ?! ペっ! ペっ!」

口に入つたえぐい味に顔を歪めるアリス。

そこは薄暗い世界だった。

粘つくような黒い雨が延々と降り注ぎ、ドロドロに溶けた土地が広がっている。

「な、なによここ」

「幻想郷ですよ。ほら」

早苗が指さす先には確かに先ほど見た巨大なビル群がある。だが窓は割れ、地盤は傾き、隣のビルに寄りかか

### 【第三章 覆水不返】

る様は先ほどまでの威厳ある出で立ちとはどうにも結びつかない。

「なに、が」

「終末という奴ですよ。キリスト教的に言うならばハルマゲドン、北欧神話的に言うならばラグナロク。シンブルにこの世の終わりと言っても構いません。ただ宗教学の言い草と違ったのは（その後）は無かったこと」

目を焼くような光が瞬き、霊夢たちはそちらに視線を向ける。そこにはバラバラになった妖怪を踏み越えていく人間の姿があつた。

「——な」

「平和な世界の果てにあつたのは、二つの種族の殺し合いでした」

それは未来世界とは思えない生臭い戦いだつた。

太鼓のような音は銃声と呼ばれるもので、人間の手元で音が鳴るたびに冗談のように妖怪が倒れて行く。一方で妖怪たちも負けては居ない。強靱な身体で肉薄し、人間を引き裂いて行く。高位の妖怪なのだろう、妖術を駆使し一挙に人間を殺害していく者もいる。

散らばる死体。血と火薬の匂い。その中を行く人間と

妖怪の行進。焼けた肉の匂いにアリスが思わずゲロを吐いた。

「誰もが平和な世界になると信じていたし、願っていたはずです。けど不思議なものです。お互いがお互いが必要としなくなった途端、人間も妖怪もその存在を許せなくなつたのですよ」

重々しい金属音が響き、死体を踏みつぶしながら巨大な装甲車が現れる。その天上に備え付けられた筒のような物が一閃すると、遠くの方で火柱が上がる。

「力を手に入れた人間はもはや妖怪を恐れない」

再び筒が妖怪たちの一団へと向いた時、空から弾幕が降り注いだ。

「自身を確立した妖怪には、人間は己の身を脅かす存在に過ぎない」

上空から強襲してきた一団の背にはコウモリの羽がついていた。その先頭を駆けるのは、赤い瞳を持つ少女だ。

「レ、レミリア!？」

見知った少女は腕が紅い槍を生み出し、装甲車へと投げかける。超常の力に堪らず弾ける装甲。衝撃で焼けた装甲に妖怪たちが群がり、その隙間から侵入していく。

装甲車の中から悲鳴が響く。金属網のかかっていたフロントガラスが赤い飛沫に濁る。その様子にレミリアは唇を舐め、次の獲物を求めて羽を打つ。

「レミリアだけではないな」

吐き捨てるようにナズーリンは地の果てを指さす。

黒い闇と共に異形の怪物を先導するルーミア。毒の霧を撒き散らしながら踊り狂うメディスン。遙か上空では天狗たちが風景をフアインダーに収め、ミステリアの歌声が人々を狂わせる。

その中の金髪の少女を見て、アリスは口を押さえた。金髪を振り乱し、無数の人形を繰る妖怪。頬はこけ、油のこびり付いた髪は見る影もないが、間違はなくアリス・マーガトロイドであった。未来のアリスは奇声を上げながら大地を駆け、人間大の人形でもって人々を虐殺していく。その人形が生きた人間をそのまま利用していると気づいた時、アリスは叫びを上げて目を覆った。

「違う！ あんなの私じゃない！」

「違います。貴方は人の体を利用して生き人形へと変えていました。生きたまま操られる仲間たちに、人間も攻撃を躊躇していましたね。そして貴方が一番気に入っ

ていたのはかつて自分と同じ場所、同じ時を過ごした金髪の魔女でした」

「え」

指間から自分を覗くアリス。醜悪の一言に尽きるその横顔の傍には、虚ろな目をした魔理沙の姿があった。吊られた糸に操られるまま魔理沙はアリスへと寄り添い、アリスもまたそんな魔理沙をぬめるような指先で撫でる。その指を軽く動かせば、魔理沙の肉が吊りあがり、満面の笑みが生み出される。

「貴方は人間を自由に操りたかった。貴方にとつて人間とは糸に吊られる操り人形。自分に都合よく動き、絶対には逆らわない愛玩具だった」

「い———っ！！」

「早苗。あなたは私たちに悪趣味な幻想を見せるのが目的だったの？」

声も出せないアリスに代わり霊夢が間に入る。早苗は肩を竦めると祓い棒を軽く振った。

「後は泥沼です。戦いが戦いを生み、憎しみが憎しみをいざなう。どこから始まり、何故戦っていたかも忘れるほどに人間と妖怪は殺し合います。流した血の量を競い

### 【第三章 覆水不返】

合い、死体の上に死体を埋めて。気付いた時には全てが遅かった。無限とも思えた資源はいつの間にか底をつき、積み上げた街並みはあっさり滅んだ。世界は自ら回復することもできないほどに傷ついてしまっていた」

暗転した世界に朝日が広がる。

何十億年と世界を照らしてきた太陽の光。しかしその光は、闇に隠すべき穢れも露わにしてしまう。

積み重なった死体。

血を吸い泥沼のようになった大地。

腐臭と硝煙の匂いは目に見えそうなほどに強く、焼け焦げた死体にはまだ火の粉が燻っている。

ああ、と理解する。

最初に感じた匂い。その正体。

あれは（死の匂い）だ。

人間、妖怪、自然、人工物、そしてその魂の全てが死んでいく気配だ。

人は自らに危害を及ぼすものに嫌悪の匂いを覚えるというが、それが本当ならばあの匂いはまさしくその最上級のものだったのだ。

「これでわかっていただけたでしょうか」

「……それじゃあ、あんたは」

「未来を救う方法は唯一つ。過去に戻り、過ちを犯す前に修正すること」

早苗の声はどこまでも冷たい。

「人と妖怪はわかりあってはいけない。そんなことは最初からわかっていたはずなのに」

「でも！」

白蓮の声に早苗が顔を向ける。ゆっくりとしたその動作は、まるで殺意を押し込めるようだった。

「聖白蓮」

早苗が正面を向く。その落ち窪んだ瞳に、白蓮は喉の言葉を飲み込む。

「貴方はとても良い人だと私は思っています。人のことを思いやり、救いの道を模索しようという信念とそれを実行する力があります。とても素晴らしい人です」

そこまで言って、早苗はふうと息を吐く。

「そういう奴が世界を滅ぼすんですよ」

早苗の瞳孔が急激に細まり、白蓮の顔を見据えた。

「白蓮！」

霊夢の声に白蓮は後方へと飛びのいた。魔力が乗った

身体は超人的な加速であつという間に超音速へと達する。視界に映る早苗の姿は既に米粒のようだ。だが、それでも首筋にナイフを当てられているような感覚が拭えない。「貴方は本来誰かを救えるような人格ではない。矮小で器量の狭い、そのくせ考えなしの善意を持つ人物です。善人が政治を執るなどおぞましい。腐った果実を放置して、他の実までも腐らせる」

早苗の足が空を捉え、腿の筋肉が弓のように引き絞られる。身体を前に倒し、肉食獣のそのように姿勢を低く取る。

「死んどけや」

ムラサもナズーリンも白蓮を守ろうと動くが、その動きは致命的に遅い。アリスは呆け、霊夢は身体の痛みに動けずにいた。

早苗が顔を上げる。

青い眼光が遥か果てで星のように駆ける白蓮を捉えた。

——その瞬間、世界がひび割れた。

少なくとも霊夢にはそう見えた。霊夢たちの中心、そ

の空間に亀裂が走り、ガラスが穴に落ちていくように、吸い寄せられていく。

「早苗——」

思わず叫ぶ。だが当の早苗も目を見開き、事態に備えるように身体を硬直させていた。ひびはさらに広がり、その中から墨をこぼしたような漆黒が覗く。飛びのく霊夢たち。だが、いくら進んでもまるで距離が開かない。

空間ごと吸い込まれている。

理解が遅れたのは、身体にまるで圧力を感じなかったからだ。気づけば目の前は黒色でいっぱい、自身の周囲さえも細かなひびが走っている。

視界が割れる。眼球さえ砕かれたかと思う。まったくの闇の中へと吸い込まれ、声さえも闇の中に消えていく。

次に現れたのは、滝のように脳内に流れ込む情報だった。先ほど見た繁栄と荒廃の歴史。その一分一秒までもが脳裏に蘇る。同時に聞こえてくるのはその時の生々しい音声。悲鳴、歓声、怒声、笑い声。鼻には甘い匂いと刺激臭が押し寄せ、口の中に味さえ広がる。

五感それぞれで噛み合わない感覚を押し込まれる。激しい船酔いの感覚。頭痛と吐き気に霊夢は口を押さえよ

### 【第三章 覆水不返】

うとするが、そもそも押さえるべき口や押さえる腕がどこかにいつてしまっていた。

排水口に流される汚物はこんな感覚なのだろうか。そんなことを考えながら、霊夢は情報の濁流に飲まれて、ことん。

身体の痙攣で目を覚ました。左手にかかったのは酒だろうか強いアルコールの匂いが香っている。恐らく自分が持っていたのであろう白磁の湯呑みが木製の階段を転がる。

眼をこする。

空はいつの間にか黒に染まっていた。その天頂には金色に輝く月がある。あの夜も空にはこんな月が浮かんでいたはずなのに、不思議とこの月は穏やかに見える。

「なんだよ霊夢。酔っぱらったのか？」

全身が静止した。湯呑を拾おうと手を伸ばした格好のまま、霊夢は軋むように顔を上げる。黒い帽子、白いエプロン、肩には箒を乗せていて、金色の髪の間には赤みかかった頬が覗いている。

魔理沙。

「な、あ、あんた死んだんじゃ」

「縁起でもない。なんだよ本当に酔ってんのか？」

魔理沙が傍に置いてあった水差しから水を注ぐ。湯呑みに注がれた水の冷たさに、否応なくこれが現実だと思いが知らされる。

唇をつけた。

「霊夢さん！」

ぶほっ、と霊夢は水を吹き出した。階段を登ってきたのは見紛うことがない、東風谷早苗その人だ。

「さ、早苗!?! なんでここに!?!」

「なんでと言われましても。魔理沙さん、霊夢さんどうしてしまっただんですか？」

「さあ？ 頭のネジでも落したんじゃないか？」

霊夢じつと早苗を見つめる。早苗はそれを挑発とても受け取ったのか、腰に手を当てふんと荒い鼻息を吐く。

「もうっ。霊夢さん、主催者がそんなんじゃ困ります。

この祭りは守矢神社の協賛なんですから」

「……祭り？」

「博麗神社の神遊び。現在進行形で忘れるなんて、どう

かしてますよ。そんなことだから信仰が集まらないんです。霊夢さんもつと巫女としての自覚をですな」

「つと、ほれみろ」

空中を震わす振動に霊夢は思わず立ち上がる。敵の襲撃かと身構えるが、隣に立つ魔理沙はのんきに口笛を吹いていた。

「せっかちな奴らがおっぱじめたぜ。あれは萃香と——」

「あ、諏訪子様ですな」

空に広がる弾幕の花。色とりどりの火花がまるで生きているように空を駆ける。その間を鳥のように舞い踊る二つの影。弾幕の明りに照らされるその姿は、小さな鬼と鉄の輪を持つ少女だ。その顔に殺意はなく、純粹に腕の試し合いを楽しんでいる。

「——ここは」

「さ、行こうぜ」

脳裏に浮かんだ違和感は、手を引かれる感覚に霧散する。冷たい夜風は曇った頭を洗い流してくれるようで、手のひらの暖かさに身体の緊張がほぐされていく。眼下では出店の間を人々が行き交い、人間に化した妖怪も同じように歩きまわっている。

その全員が顔に面を付けていた。

「なんで、お面を付けてるの？」

「アイデアを出したのは霊夢さんでしょう？ 妖怪が人間を怖がらせないように、って」

そうか、自分はそのことを言ったのか。

なるほど面白いアイデアだ。

「元々はパチュリーからのネタだけだな。はろいんとかいう奴な。飛ぶぞ」

石畳を蹴り、二人と共に空へと向かう。

その先には月の舞台でワルツを踊る二人の少女が居る。周囲には囃し立てる人影。あそこに立つのはアリスだろうか。BGMを奏するのは騒霊たちだ。船の上から喝采を送る白蓮と神子たち。プロ根性で弾幕を避けつつショットを切るのは射命丸を始めた天狗たちだ。

地上ではお面をかぶった人々が弾幕の空を眺めている。

人間も妖怪もここに居る全員がこの空気を楽しんでいる。ここでは誰もが平等だ。戦い一つにも皆が納得し、楽しむことができている。

その事実になんだか胸が熱くなる。

魔理沙から手を離す。左手には薙い棒。右手には五枚

### 【第三章 覆水不返】

の札。風と共に飛び立つ鳥のように、霊夢は空の光へと駆け昇る。

「こらあ！ あんたたち！」

何をすべきか自然と理解できる。自分が何者か定義される。人と妖怪の交わりし場所で、霊夢はその合間に滑り込む。

私は博麗の巫女。博麗霊夢だ。



改革は『妖怪の復権』と『英雄の出現』の二本柱によって進められる。

妖怪の復権はいわずもがな、萃香率いる山の妖怪たちによって達成された。理不尽ともいえる突然の暴力。抗うことすら許さぬ恐怖は人々の奥底に深く刻み込まれたことだろう。もう一つの英雄の出現。これは神子に任せられた。聖徳王の名は幻想郷にも轟いており、英雄として祀るには最適だ。だが、英雄が生み出されるにはそれに釣り合う〈悪〉が必要だ。

だがその役目は妖怪ではいけない。彼らは〈恐怖〉で

はあつても〈悪〉となつてはならない。彼らが〈悪〉になれば、人はいずれ奮い立つ。妖怪を倒せと立ち上がる。恐らくは人間の中から本当の英雄が生まれてしまう。それではいけない。目的は人と妖怪の共存なのだから。

生贄が必要だ。平和な世界を破壊し、英雄に裁かれるべき〈悪〉という名の生贄が。人々の怒りの捌け口となり、その身を裂かれるべき生贄が。

そう言つた意味で、神子の頭脳は極めて有用であつた。彼女は人が望む答え、人の心の誘導の仕方を熟知している。流石は虚栄と裏切りの渦巻く政治の世界を制し、時代を築いた王と言うべきか。彼女は自身の欲のためには手段を選ばない。彼女が恩情を与えるのは自身の元にした臣下と民だけだ。それ以外の者など、鼻奥に詰まつたハナクソほどの価値もない。だから彼女はどんなに残酷な手段も有効だと認めれば躊躇いなく使う。

例えばそう、拷問や凌辱の類であつても。

「顧みなさい。そして理解するのです。この痛ましい異変は起こるべきして起きたことだと。全ては命蓮寺が仕組んだことなのです」

張りのある神子の声が里の中に大きく響く木霊する。

里の中心、大きな屋敷の頂点に立つ神子は、背負った太陽の光と共にまさしく太陽の化身であった。

妖怪の襲撃から一夜明け、神子の張った結界によって里にはつかの間の平和が戻っていた。しかし、それで人の不安が拭えるわけではない。結界は本当に完璧なのか、妖怪は果たしてもう訪れないのか、いやそもそも何故こんなことになってしまったのか。その不安に渦巻く心に神子の声は、さぞ力強く甘美に響くことだろう。

「し、しかし神子様。命蓮寺が何故？ あの寺は妖怪と人の共存を願っていた」

「そうだ。白蓮さんは俺たちにとつても良くしてくれた。まさかそんなことを」

まばらにあがる否定の声。恐らくは命蓮寺を、いや白蓮を慕っていた者だろう。声には出さないがそれと同調する雰囲気は薄霧のように里に広がっている。なるほど。命蓮寺の草の根運動は着実に実を結んでいたようだ。僧侶としては十分な仕事ぶりだと言える。だが、

「それこそが聖僧侶の、いいえ、怨敵白蓮の畏です」  
声を上げる里人の意見を、神子はぱつぱりと切り捨て

た。畏という単語に耳を奪われたのだろう、里人からは動揺の聲が上がる。

「よくよく考えてください。人と妖怪の共存。そんなことをして一体彼女に何の得があるのです？」

「……人と妖怪が共に暮らせば無用な争いは減って」

「では聞きますが、妖怪が人を喰わずにどうして生きられるのですか？」

「そ、それは」

「目覚めなさい！」

突然の怒声にびくりと肩を震わせる。子ども大人も母に抱かれた赤子さえも、神子の姿に目を奪われ、次の言葉を待つようだ。神子は地面へと降りると一人の男へと近づいた。

「その貴方」

「は、はい!？」

突然神子に指さされ、大柄の男は背筋を伸ばした。先ほどまでの怒声とはうってかわり、まるで囁きかけるように神子は言う。

「今、貴方の目の前に獣が居ます。その獣の体長は三メートル、体重は二百五十キロ。指先には喉を切り裂く鋭

### 【第三章 覆水不返】

い爪、口には頭さえも噛み砕く牙。全身の筋肉はしなやかで、走れば時速六十キロ、跳躍力は七メートルを記録します。表情の読めない眼球が貴方を見つめています。空腹なのでしょうか口元はよだれが泡立ち、指先を震わせて今にも飛びかからんばかり」

「ごくり、と男の喉が鳴る。周囲の者も神子の話に聞き入るように固唾を飲む。

「しかし、不思議なことに獣は襲いかかってきません。ごろんと寝転がり、まるで眠ってしまったかのよう。しばらく警戒していた貴方もまったく動かない獣に、いつしか警戒心を解いてしまえます。尻尾を触ろうと、上に乗ろうと抵抗しないその獣。安心だ。貴方はそう思いません。慣れてしまえばむしろ獣の身体は気持ち良い。毛並みはふさふさだし、よくよく見れば愛嬌ある顔です。ぶにぶにの肉球。体温は三十八度付近と湯たんぼみたいにあったか。思わずその腹に寄り添い寝てしまいたいほど。だからでしようか仲間たちと別れ、貴方はその獣と二人つきりになってしまえます。仲間たちにはもう声は届きません。この距離では逃げることもできません。油断しきった貴方の背中に獣は襲いかかってきます。貴抵

抗できません。獣の爪が腕を切り裂きます。皮どころではありません。骨が露出し赤い繊維が見えます。千切れた肉は赤い液体にひたした雑巾のよう。痛い。痛い。痛い。叫んでも誰も来ません。獣が口を開きます。喉には噛み付きません。もはや急いで殺す必要すらないからです。ああ、太ももが食いちぎられてしまった。ぐちゃぐちゃと咀嚼される身体の分身。もう立つこともできない。腕も足も砕けたイチジクのようなありさまです。次の狙いは腹。分厚い鼻先が押しつけられ、ヘソのちようど真ん中に狙いを定め、そして——」

そこで一人の女性が悲鳴を上げた。男だけではない、話を聞いていた周囲の者もみな青い顔をして地面を見つめている。中には口を手で押さえ吐き気を堪えている者さえいる。

「貴方たちが今までしていたのは、つまりこういうことなのです」

そう総括し、神子は救いを求める預言者のように両手を広げる。

「私は時代の為政者として国を治めたことがあります。だからこそわかります。彼ら妖怪は人を喰らい侵すこと

しか考えない。この幻想郷を目の当たりにした時、私は恐ろしさに身震いしました。人々の間を妖怪が歩く、こんなことがあっていいはずがない。確かにこの里にも妖怪は顔を出していたようですが、それはただ腹を空かせていなかったというだけのこと、そして傍に居ても不思議ではないと思わせるためなのです。命蓮寺は人と妖怪の共存などという尤もらしい錦旗を上げて人を集め、一気に喰らう腹づもりだったのですよ」

もはや反論の声を上げる者は居ない。

「——惚れ惚れしますね」

家屋の影から早苗はつぶやいた。全ての事情を知る早苗からしてみれば神子の論理は穴だらけな屁理屈と断じることができる。だが彼らにはただ理不尽に妖怪が暴れた、という事実しか存在しない。中には家族が虐殺された者も居る。手足をもがれた者も居る。それだけに話は実感を伴って里人の耳に届いたことだろう。

今の彼らにとつて重要なのは、これらの痛ましい事実がなぜ起こり、そしてこれから自分たちはどうなるかという不安と恐怖だけだ。そこに神子は人々が望む答えを提供しようとしている。彼らは心のどこかに疑惑を感じ

ていても、それを直視することができない。できたとしてもそれに確信を持つことができない。しきりに他者と顔を見合わせているのが良い証拠だ。彼らは誰かに答えを出して欲しいと望んでいる。自身で答えが出せないのだから仕方がないのだろうが、その根底にあるのは幻想郷という特殊な環境で生まれ育った故のぬぐえない悪習だ。彼らは自分で考え、答えを出すことができない。狭い世界で生きた結果、挑戦や個というものを削り取られてしまったのだ。残ったのは強烈的な指導者に追従する保身意識のみ。それを早苗は嫌というほど理解している。未来の世界でも、幻想郷の住人たちは神奈子に言われるままに妖怪を殺し続けたのだから。

「未だに真実を認められないというのなら見るのです！ この者の姿を！」

そして最後のダメ押しだ。誰もが認める客観的事実を持って、神子の論理は完成される。

「星様!？」

布都と屠自古に連れられたのは命蓮寺の本尊である寅丸星であった。手足を縄で縛られ、口には猿轡を噛まされているがその姿は見紛うことない。意外な人物の出現

### 【第三章 覆水不返】

に里人は息を飲む。本来ならばすぐさま駆け寄り救い出すべき人物であるのに、頭にこびりついた疑惑がそれを許さない。

「見よ！ これこそが貴方たちが信じていた命蓮寺の正体です！」

動けない里人の前で神子は腰の剣を抜き、星に向かい一閃した。裂くような悲鳴が上がる。だがその切っ先は星の身体を裂いたわけではなかった。

「っ!? うう~~~~~~~~っ!」

瞬間、星の身体は雷に打たれたように震えた。猿轡を食いちぎらばかりに噛み締める。メキメキと音を立て、その姿が変異していく。頭からは耳が生え、口には牙が並び、雄々しい尻尾が伸びれば、その姿は誰もが知る凶獣の物となる。

虎。

神子が諭えた醜悪なる獣がそこに居た。

「見なさい！ この禍々しい姿を！ 命蓮寺が神の化身と祀っていた寅丸星は、人を喰らいし妖怪だったのです！ この事実をもつてもなおも命蓮寺を信ずると言う者が居るならば前へと出なさい！」

「——」  
誰もが息を飲んだ。その間は、明かされた事実に対する理解の間だった。

「……死ね」

誰かが呪詛をつぶやく。どこからか大粒の石が星の目に投げつけられた。星が猿轡の下から悲鳴を上げるが、もはや関係なかった。里人のざわめきは黒い怒りに変わっていき、里人は次々に石を握りしめ、力の限り星へと投げつける。

「死ね！ 死ね！ お前のせいで女房は！」

「返してよお！ 私の腕！ 顔！ 返してよ！」

「クソ妖怪が！ 俺たちをずっと騙っていたんだな！」

「いつ！ つうう！」

石の嵐に星は堪らず蹲る。人々は津波のような罵声を浴びせながら、精根と石が尽き果てるまで妖怪虎を責め続ける。怒りと悔しきで悲痛な声を上げる人々の手を神子は優しく取っていった。

「大丈夫です。これからは私が守りますから」

「神子様！」

その手の暖かさに人は真実を見出す。

この方こそ、我らの王であると。

「良い舞台だったでしょう？」

「はい。流石です」

その後はドミノ倒しのように計画が進んでいった。神子は里の指導者となり、これからの里の運営、妖怪対策に関して一任されることとなった。妖怪襲撃によって里長を始めとした里の首脳陣がほとんど全滅し、博麗の巫女までもが行方をくらましたことに加え、残った権力者たちが神子を強く推薦したことも大きかった。

無論、神子が恐怖を植え付けそして手を取った相手が、その里の権力者であったことは偶然ではない。

「この席を見たら、卒倒するでしょうね」

酒の入った杯を揺らす早苗に、神子は不遜な笑みを浮かべる。萃香、紫、そして神子たち。人と妖怪の率いるトップたちが一堂に会している。

「わはは！ うまいのお！ 饅頭は！ 酒饅頭じゃ！

酒饅頭じゃ！」

「布都、いつの間に分身できるようになったんだあ？  
ずるいぞ！ ああ！ お酒がない！ 誰が飲んだ！ あ、

自分か。あははは！」

「ほらほらまだおかわりはあるよ」

すっかりできあがってしまった布都と屠自古は、二人で折り重なりながらぐびぐびと酒を飲む。それを煽るように萃香は酒を注ぎ入れていた。

「寅丸星が元妖怪、だというのは知っていましたが、それをあまで活用する手腕は素晴らしいですね」

そもそも寅丸星は本人ですら自身の元の姿を忘れてしまっており、妖怪には戻れないと言っていた。それを成し遂げたのは神子の卓越した洞察能力によって星の過去の姿を再現せしめたからだ。

「仏と崇めていた者が妖怪とあつては、さぞ驚き裏切られた気分だったでしょうね」

「妖怪が神になることなど良くあることです」

「それを意識させないのが我らの仕事。でしょ？ 太子様？」

するりと異空間を抜けて来たのは青娥が、微笑みながら言った。

「人とは集まれば集まるほど身体も頭の回転も鈍るもの。気が付けば楽な方へ考えなくても良い方へと向かってし

### 【第三章 覆水不返】

まう」

嘲笑するように口元を歪める青娥。人々の前に姿こそ現していないが、青娥も今回の演説には一枚噛んでいる。

誰よりも早く星に罵声と石を投げた者。あれは青娥が用意したキョンシーたちの仕業である。その一投で里人の意識は決し、もはや本人たちですら止められなくなつてしまつた。

「彼らは後味の悪い決断はしない。ならば汚名も責任もこちらで持つてあげれば良いだけのこと。全てが終わつて自らの行為が暴露されても、あいつらに担がれたんだと言いつて済ませようにしてあげること。英雄とは次の生贄でもありませんからね」

「ふふ、嫌な言い方をしますね青娥は。しかし事実です。彼らは楽をして美味しい汁をすすりたい。一方でそれに足るような苦しい目にも合いたい。楽と苦。その釣り合いが取れる場所を用意するのが政治」

愉しげに笑いながら、神子は肴でも探すように暗い夜の闇を見やる。里長の屋敷の地下では今なお星に対する粛清が続けられている。殴る蹴るの暴行をひとしきり受けた後は、性的なものへとシフトしていった。半獣の姿

とはいえ未だ女性的な魅力を十分に残している星は、恐怖を乗り越えようとする男どもの欲望をモロに受けるだろう。無論、女性相手の場合もあるか。顔に小便を浴びせられ、性器からは子種を噴き出し、尻の穴までも蹂躪される。盛り上がった一部の里人などは里の中心に拘束台を作ることまで計画していた。

「その内に、見世物として里の中心に置かれるかもしれないですね」

「たまのイベントとしては良いんじゃないかしら。凌辱されたり、糞尿を撒き散らしたり。そんな姿を見られて絶望する女の子って好きよ」

「良い趣味してますね。青娥は」

「あら、太子様だつてそうでしょう？」

「まあそうですが」

盛り上がる二人を余所に早苗は酒の水面に侵される星の姿を見る。彼女にとつて不幸だったのは、その精神と肉体が半端な強さではなかったことだろう。いつそ心を砕いてしまえば楽であつたらうに、未だに正気を保つたままかつての信者たちに犯されてなお仲間たちが戻つてくることを信じている。半ば意地で、半ば本気で。



### 【第三章 覆水不返】

「飲まないのですか？ 手が進んでいないようですが」  
ずいと顔を寄せて来た青娥。その言葉を否定するように早苗は酒を飲み干した。

「あまり酒は好きではないんです」

「そんなこと言わずに、はい、かけつけ三杯」

早苗の許可も取らず、青娥は杯の中に袖から出した酒をとくとく注ぐ。

「遅れたのは貴方でしょうに」

「それにはちやんと理由がありましてよ」

わざとらしく言い、青娥は空間の穴に向かい手まねきする。そこから現れたのはキョンシーの芳香だ。青娥のお気に入り兼戦闘員ということで普段から一緒にいるのは珍しくもないが、その手に握られた縄とそれに繋がれた人物には早苗たちも眉を寄せた。

「なんか私たちのこと調べてみたいなのよね」

「射命丸。お前」

萃香の低い声に縄で縛られた射命丸がちがちと歯を鳴らす。一瞬にして屋敷の温度は下がり、重苦しい沈黙で支配される。

「あんたは賢いと思ってたんだけどな。好奇心は猫を殺

すって言うけど鴉も同じか」

どっこいしょと立ち上がる萃香。ぐるりと肩を回し、拳を握る。

「悪いね神子。部屋あ汚すよ」

「ま、待ってください萃香様！」

縛られたまま射命丸は萃香の足元へとすがりつく。

「こ、このことは誰にも言いません！ それに私、萃香様の、皆様の役に立ちたいんですよ！ 言ってください何でもします！」

へっへえ、と奇妙な笑いをもらし、射命丸は上目遣いに卑屈に笑む。萃香の足裏を舐めんばかりに頭を下げて、足に頬を擦り付ける。

「……大したもんじゃないか。その見苦しさをもつと他のことに使えたら大成したかもね」

萃香の足が畳を打ち抜く。ひい、と声を上げて射命丸は飛び上がる。めくれたスカートの中ではショーツに黄色い雫が滲み出していた。

「せめて痛みも無いようにしてやるよ。来世では反省を活かすことだ」

「まあまあ、萃香さん。抑えて」

振り上げられた腕の間に神子が身体をはさむ。猫のようにピンと張った髪がびくびくと揺れているのを早苗は見逃さない。どうやら神子の酔狂の虫は髪の中に居るらしい。

「これも何かの縁。全てを掌握するには人手不足であったところでしよう？ 計画に多少のミスが生じてしまったのもその点が大きいのですから」

「はん。嫌味なら正直に言えばどうだ？」

「嫌味だなんてまさか。そんなつもりは毛頭ありませんよ。しかし、私の言葉を嫌味であると感じるならそれは萃香さんが責任を感じているということ。そして事実として私たちはミスを犯してしまった。博麗しかり命蓮寺しかり。姿をくらました彼女らは未だに姿を見せていない。どこぞに潜伏し、反撃の機会を窺っているのかもしれない。これは無視できない懸案です」

「そもそも白蓮たちを取り逃がしたのはあんただろう？ 聞いたよ。霊夢にはめられて結界に閉じ込められたんだって？」

「面目ないです。だからこそ、今度こそ仕留めるために戦力の充実を図りたいのですよ」

「良く回る舌だねえ。閻魔に抜かれる前に私が取ってやろうか？」

睨み合う両者。片や妖怪の山を統べる鬼神。片や人智を超えし超人。間に挟まれた射命丸は生きた心地がしてないだろう。とはいえ、ここで殺し合いを始められても困る。

「別にいいんじゃないでしょうか」

萃香は不満げに口を閉じ、神子はおっという感じで顔を緩めた。

「早苗。いいのか？」

「事実、人手不足は実感していました。もう少し人を集めてから始めるべきだったと思っていた所です。射命丸さんは誠実ですし大丈夫でしょう。ねえ、紫さん」

突然、話を振られ今まで黙って酒を飲んでいた紫は、ゆつくりと顔を上げた。

「……これは貴方が始めたことだわ。幻想郷を守る範囲での話なら、貴方の判断に任せるわ」

「はあ。なんだよ紫」

紫の答えに萃香も毒気を抜かれたように肩をすくめる。

「わかったよ。勝手にしな」

### 【第三章 覆水不返】

「だそうですね。良かったですね射命丸さん」

縄を解きつつ神子は囁く。腰を抜かしたのか、射命丸は脱力したままぺたんこ座りこんでいた。

「では、ちよつと失礼します。片づけておきたいことがまだありますので」

社交のように酒を一気に飲み干し、早苗は席を立つ。襖でも開けるように空間の出口を作り、幻想郷へと出て行く。その姿が消えた時、穴は奇麗に塞がれていた。

「——ああも簡単に穴を開けられては、やってられないですね」

含み笑顔の青娥のだが、目はまるで笑っていないかった。

そつと神子は青娥の横へと寄り、

「青娥、さっきの酒ですが」

「はい。ちよつとした悪戯を。死人も飛び上がる特製スパイス入り。あの鉄面皮を少しは剥がせるかなって思ってたんですが」

袖から酒を出し、軽く床へと落とす青娥。雫を受け止

めた床は焼けるような音を出して白の煙を上げる。

青娥はけほつ、と咳を一つつき、

「あの人には舌も鼻もないんですかね」

「あるいは心もね」

神子のつまらないジョークを笑い飛ばす者は一人もいなかった。

酒が好きではないのは本当だし、そもそも早苗の舌は旨いも不味いもわからない。空気の読めない下戸との酒宴ほどつまらないものはないだろうし、権謀術数な腹の探り合いを差し引いても彼女らとの飲み会が楽しいはずもない。

守矢神社の鳥居の上で、早苗は夜の幻想郷を眺める。

恐らくは美しい自然と称される幻想郷の夜景。天然素材を使い未来の世界でこの景色を見ようとすればならば、人生を七回は買える金を払わなければならないだろう。だが早苗の目にはどこか空々しいものに映る。それは自分がこの世界の異物であるからだろうか、それとも自分の心が煤汚れてしまったからだろうか。

だが、それでも良いと思う。

「……わかっています。役目は果たします」

無言で佇む非想天則を背後に感じつつ、早苗はぐつと背中を伸ばす。

——天に則て思うに非ず——

なるほど非想天則とは良く言ったものだ。

あるいは自分もこのヒトガタと同じなのかもしれない。

「我も亦、思うに非ず……か」

今宵の幻想郷には風一つない。人々は英雄の加護に眠れぬ目をなだめ、妖怪は今後の日々舌なめずりをする。

今日という日は嵐の前の風過ぎない。

本当の宴はこれから始まる。

「それまでその命、千年前に預けてあげますよ」

その言葉を残し、早苗と非想天則は風の中に姿を消す。

踏み砕かれた鳥居は、千年の時を経たように崩れて落ちた。



夢を見ていた。

悪い夢だ。誰かに腕を掴まれ、ぐいと引かれる。森の果てに連れ込まれ、さらにうつつそうと茂るその先へと連れ込まれる。そっち行つてはいけない。そう言おうとす

るのに、喉に穴でも開けられたように声にならない。やがて森は深まりもう来た道には帰れないと確信する。気づけば地面はラードのような白い泥になっていて、ぐちやぐちやと踏むたびに靴に白の破片がこびりつく。ときおりプラスチックの破片のようなものが突き出し、アリスの身体を傷つける。それでもアリスは走らされ続ける。走らされながらアリスは泣いた。どこに連れて行かれるのだ。なんで私がこんな目にあうのだと嘆く。

いつの間にか腕は消えていた。だけど勢いついた足はもう止まらない。坂道を転げるように、視界が廻った。気づけばアリスは汚泥の中に半身を突っ込んでいた。汚泥は白いウジの集合体だった。節のある身体の前には収縮を繰り返す口鉤があり、それらがアリスの肌を吸いつき皮膚をえぐる。じわじわと皮を溶かされ、赤い肉が露出した。そこにさえウジは侵入し、筋肉と脂肪を凄まじい勢いで溶かしていく。思わず叫んだ。

やめる！ 私はまだ死んでない！

ウジはこれ幸いとアリスの口内へと侵入してきた。慌てて口を閉じようとするが、あごの筋肉にはすでに白い軟体がのたうっていた。舌や歯茎さえも小さな口に吸わ

### 【第三章 覆水不返】

れ、穴だらけになっていく。

どういうわけかアリスは空中から自分を見ていた。もう身体はボロ雑巾とまったく変わらない。骨と髪の毛と服の一部を残してすっかり身体はウジに食われてしまった。最後に眼窩から目玉から落ち、その隙間からウジが蠢く。黒い頭部がじつと見つめているように思え、アリスは悲鳴を上げた。

……気がつけば、アリスは森の中に居た。

何ともアホらしいことに、アリスは自ら口を必死に閉じて窒息しかけていた。口を開けてみればカラカラに涸いた喉に新鮮な森林の空気が飛び込んで来る。

「ここは」

肺の空気を入れ替えると少しだけ余裕ができた。アリスは立ち上がり周囲を見回す。敵の姿もなければ味方の姿もない。うっそうとした森にどきりとするがどうやら違った。耳に届く鳥の声。流れる川の音。土と葉の匂いと木漏れ日の暖かな感触。

川。

「あー」

ぼやくようにアリスは青いスカートを広げてみた。そういえば昨日から——ここが次の日であればだが——服を着替えていない。汗もかいたし、汚れもついた。何より丸一日お風呂に入っていないというのはレディとしては我慢ならない。夢の中で散々怖い目にあっただけか、それとも涙を流して少しだけすっきりしたせいなのか、アリスの身体は多少軽くなっていた。

身体を洗おう。服も洗おう。

アリスは音を頼りに川へと向かった。その背後でじつと自分を窺う相手には、最後まで気づかなかった。

「う、落ち着かないわね」

服を水洗いし、木の枝に掛け、アリスは川の中へと身を預ける。どことも知れない場所で、全裸になるとするのは何とも気恥かしい事だった。誰も見ていないはずなのに辱めを受けている気分になる。なるだけ胸を隠しつつ、上海人形に背中を擦らせる。

そういうえば、初めて温泉に行った時も本当に驚いた。石で造られた大きな湯船が一つつきりあるだけだったのだ。てつきり個室、そうでなくても個々人で仕切られていると思っていたのに。少なくともアリスの知る温泉は

そういうものだった。さらにそこに何の疑問もなく入っていく連中の神経にはほとほと呆れた。こいつらに恥じらいという概念はないのか、ここは未開地の原住民の住処か。冗談じゃない。あんたたちと一緒になんかいられないわ。私には衛生観念と貞操感があるのよ。

そんな自分も、いつの間にかごく普通に裸の付き合いという奴をこなしていた。

「慣れつつ怖いわね」

つぶやき、当事を思い苦笑いをすると、急に胸にぽっかりと穴が開いた。

不意に不安になる。

顔が歪むのを自覚し、アリスは川面に顔を叩き付けた。歯を食いしばり、藻のためたう岩を睨みつける。耳には川水の中の泡音だけが聞こえ、糸が切れた。

「っ!!」

顔を上げて右手側に振り向く。命がけの間違え探しの始まりだ。張り巡らしていた探知糸が切れている。風もないのに木々がわずかに揺れている。枝に掛けていた服が無くなって、肌着だけが枝に引っかかっている。

「な、なにお!」

素っ頓狂な声が出てしまう。水をかきわけのろろと岸に辿り着き、飛べば良かったと今更に思ってから後悔する。枝に引っかかっていた下着を履き、髪から雫を垂らしながらアリスは森の奥を睨む。なぜだかすぐくむかむかしてきた。

「……この私を舐めるんじゃないわよ!」

腕を十字に組み、ハーブ弦を引くように指を動かす。すると青白い糸がアリスの指先に現れる。探査糸とは別に衣服に付けておいた追跡糸だ。糸巻きから伸び続けるように森の奥へとずっと続く極細の糸は、アリスの魔力が尽きない限り永遠に対象を追い続ける。相手はそれには気づいていない。これを辿れば盗人の居場所はわかるはずだ。

しかし、なぜ服などを盗んだのだろうか。

慎重に糸を辿ると、小さな家に辿り着いた。古臭い出で立ちのわりに表面の劣化などは少ない。すなわち、ここはまだ過去の世界なのだろう。ちょうど庭には洗濯物と思われる白い布が干されていた。その内の一枚を拝借し、身体に巻き付ける。何とも心もとないが下着だけよ

### 【第三章 覆水不返】

りは遙かにマシだ。

「でか」

裾を縛りつつ、つぶやく。矛盾した言い様は家にはではなく、その隣に併設された土蔵に対するものだった。土地面積で家の三倍、内容量では十倍はあるのではないだろうか。よほどこの家の持ち主は物持ちがいいのか、そうでなければ強迫性貯蔵症の持ち主だろう。雨戸の隙間からは雑多に置かれた大工道具や木の切れ端が見えたが、土蔵に人の気配はなかった。糸は家の引き戸の隙間をくぐり、中へと続いている。

行くべきか。引くべきか。

怖がりの虫がざわめき出す。何のためにここまで来たんだと心の中で叫ぶものの《もしも》を考えてしまえば、足がすくむ。

もしも、

「——魔理沙だったら」

はっ、と気づく。そう言えば、八卦炉はどこだ。帽子の中か服の中だったか。いずれにせよ自分の手元に服も帽子もないのだからあるとすればこの小屋の中となる。

「……………」

扉に手をかけ、音を立てないようゆつくりと開く。水滴に濡れた靴で進みだせば土の匂いが鼻につく。部屋の隅には竹で組んだ背負い籠。囲炉裏には火の気はないが、積もった灰には生活の香りがある。

土足のまま家へ上がる。上海人形を前面に構え、アリスは廊下を進む。周囲の気温が少し下がったように思える。薄暗い廊下は獣の口に見えた。その最奥にはわずかに開いた扉がある。音はその部屋へと続いていた。

廊下の壁にびたりと張り付き部屋の中を窺う。意外にもそこは物置部屋のように、雑多に置かれた壺や荒縄がはめ殺し窓の日差しを受けている。

「あ」

もし糸が無ければ見逃していただろう。その部屋の隅には地下へと続く入口があった。木目も周囲と完全に同調しており、明らかに隠蔽を目的に偽装されている。節穴に指を突っ込み、床を持ち上げる。見た目よりもずつと重い。中には地下へと続く階段があり、古臭さとは裏腹にそれほど積もっていない埃は、ここに入りする者の存在を明らかにする。

「まったく忍者じゃあるまいし」

盗人が盗品を隠しておくだけにしては人間をかけすぎている。そもそもこんな森の中に家を持つ人物は一体何者だ。周囲に村はおろか、まともな家すらない深緑の奥底だというのに。

不安の虫が足をよじ登ってくる。

「わからないことは考えない！ 私は考えない！」

ふんふん、と鼻息を荒くしてアリスは扉が閉まらないように糸で縛ると、四角の穴へと身を投じた。

階段は木製の一枚板でできており、ささくれた表面に足裏が触れるたび薄皮が削られていく。片足ずつ足を伸ばしては、異形の多足虫が居ないことを心から願う。

声。

アリスは安堵した。

それが敵の声だとしても、妄想節足動物との戦いの中にあつては救いの音だった。土壁を伝うようにして聞こえてきた声は、小さいながらもどこか楽しげだ。大方、この服は高く売れそうだとか話しているに違いない。ようやく出口の明かりが目に入り、心細さを怒りに変えてアリスは先ほどよりほんの少し早い足取りで階段を下りる。声はだんだん近くなり、出口のごく近くに犯人が居

るのは間違いない。耳の下まで熱く充血する。心臓の音を殺すようにゆっくりと鼻で息を吸う。

絆創膏を剥がす時は一気にやった方が良い。

良くも悪くも痛みは一瞬だ。

「あんたっ！」

自分でも驚くほどの大声が出た。

声を出した自分がこれほど驚いたのだから、完全に不意を打たれた相手は心臓が止まったのではないかと思う。青い髪を逆立て、匙を持った手を強張らせている。その姿があまりに小さいからだったからだろうか、アリスは一気に勢いづく。

「証拠はあがっているわこの盗人！ さあ私の服を返して——」

さつきあれだけ驚いたのだから、しばらくは動揺などと無縁であると思っていた。だが脳みその衝撃メーターとはなかなか上限高いものらしい。その部屋には檻があった。イノシシが突進しても曲がりそうにない分厚い鉄柱で組まれた座敷牢だ。だがそれは些事に過ぎない。

驚き過ぎて咄嗟に声も出せなかった。

魔理沙ととりがそこに居た。



誰!?

檻の中に入った手でいた手から匙を落とし、怯えた様子でにとりは言った。

言ったと思う。

正直、ショートした頭には思考能力もまともに残っておらず、にとりの言葉をただの音として聞き流してしまっていた。ガリガリと脳内ハードディスクが音を上げ、ぼやけた頭で目の前の光景を分析・処理する。

にとりの方は記憶にある顔よりもわずかに幼い。簡素な着物に千年前という言葉が脳裏に浮かぶ。脳みそのどこかで迷彩で姿を隠していたんだなと冷静に理解する。

そして檻中の魔理沙の方。顔も背格好も良く似ているが、その髪は金ではなく黒鉛のようなくすんだ黒だ。何よりその目を離せば消えそうなか細さは、太陽よりも自己主張が激しいあの魔女とはまるで違う印象を受ける。どういうわけかアリスのドレスは彼女が着ており、口の端に米粒を付けたまま呆然とこちらを見つめている。

「や、山の妖怪じゃないのかい?」

何も言わずにぼやけた視線を彷徨わせるアリスにとりの方が動く。まじまじとアリスを見て、ぎくりと背筋

を固まらせる。

「あ、あんた! な、なんでここがわかったの?」

その言葉に少しだけ頭がクリアになる。服。そうだ服を取り戻しに来たんだ。

「なんで服なんか盗むの?」

独り言のようにつぶやく。にとりは親にげんこつを落とされる前の子どものようにううつと呻く。

「ご、ごめんよ。悪いと思ったんだけど、こんな服初めて見たからさ。つい」

まさしく泥棒の言い草ではあるが不思議と腹が立たなかったのは、にとりの中に悪意や底意地の悪さが見て取れなかったからだろうか。子どもために獲物を捕る母のような誠実さがにとりにはあったのだ。その答えはにとりの背後に隠れていた。

「……なによこれ」

「なに、って人間を知らないわけないよね?」

ちらりと背後を見つつにとりは言う。

知らないわけがない。

確かににとりの言う通りその少女は人間だ。間違いない。だがその人間がなぜこんな地下室に居るのかはわか

### 【第三章 覆水不返】

らない。それにこの部屋の様子はどうか。自由の欠片もない牢屋のくせに、内装はまるで豪族の私室だ。部屋の中には無数の人形が並べられ、見るからに高そうな服が山積みになっている。昼食とおぼしき食事の入った器も朱と黒に金粉の細工をされた本物だ。

「人間なのはわかっているわ。だけど、なんでこんな所に鎖まで繋いで。これじゃあ」

「だって危ないじゃないか」

「……あぶない？」

「そうだよ。外は危険がいっぱいだよ。人間は弱いんだ。肌をちよつと切っただけで死んじゃうし、狗にだって勝てないんだ。それに妖怪に見つかつたらたちまち食べられちゃうよ」

「それは……」

「そりゃあ、人間は弱い。妖怪と比べるべくもない。

高い所から落ちただけで死ぬし、病気にもなるし、三日も物を食べなくても死ぬ。そもそも寿命があつて、放つておいても死んでしまう。思えば妖怪を駆逐し、世界を覇するほどになつたのが不思議なくらいだ。

「私ね、人間が好きなんだ。こんなことを言うと、変人

扱いされるんだけど」

知っている。そんなことは。

「人間つてすごいよね。色んな発明をしてきた。せつせと働いてちよつとずつ生活を良くしてきた。私も発明はかじつてるんだけどね、あの執念はなかなか真似できないよ。だからね」

照れ臭そうにとりは鼻下を擦る。

「私は死にかけていたこの子を育てることにしたんだよ。凄いでしょこの部屋！ 全部私が目にしたんだよ！ 人形なんか一つ一つ作つてね。食事だって私があげているんだよ。この子が欲しいがる物ならなんでもあげたし、珍しいものもたくさん集めたなあ」

どこか傲慢げな声色が苛立たしい。

アリスは上海を浮かばせつつ、檻へ近づいた。

「あ、このことは山のみんなには内緒にしてよ。ばれたら大変なんだから——つて」

檻に歩み寄るアリスに慌ててにとりが回り込む。

「な、なにする気！」

「何もしないわよ。それよりあんた」

アリスと呼ばれ、少女は穴掘りを忘れたモグラのよう

に慌てふためく。

「あ、あんたじゃない、リサだよ！」

何か譲れないものがあるらしい。即座にとりが訂正する。

「……つたく、そんなとこまで似て」

「え？」

「それでリサ」

リサは大量の服の下にそれこそモグラよろしく隠れていた。服の合間からちよっぴり覗く目にアリスはため息をつく。

「別に何もしやしないわよ。ただ、あんたはここから出たくないのかって聞きたかっただけ」

「ちよっ！ 何を言うんだよ！」

「黙りなさい！」

アリスの怒声にとりはびいと悲鳴を上げる。

正直、こんなにも強気になれるのが自分でも意外だった。頭の中は真っ白なくせに、視界だけは妙にクリアだ。きつと今なら、腹を刺されたって気にならない。

これがいわゆる《キレている状態》なのかもしれないと取り留めもなく考える。だとしたら、自分は一体何に

キレているのだろうか。

「正直に言って。こいつには何もさせないから」

本気だった。

もしにとりが邪魔をするとしたら、全力をもって相手になるつもりだ。その結果、腕の一本や二本くれてやったって構わないとさえ思う。だがリサは服の中で小さく首を振った。

「どうして？ ここがそんなにいいの？ それともこいつに恩を感じてるから？」

リサは戸惑いしつつも両方に首を振る。

「なら、どうして？」

にとりとアリス、二人に見つめられリサはもぞもぞと服の中で蠢く。かといって無視を決め込む度胸もないのだろう、小麦から団子を作るほどの時間をかけてようやく答えを出す。

「……お外、怖い」

「え？」

沈黙。服の山が微動する。

「お外、怖いから。痛いのも嫌。辛いのも嫌。だから」

「——だから、ここに居たい？」

### 【第三章 覆水不返】

頷き。

「ねっ、ねっ！ そうだよね！ うんうん、やつぱりリサはここに居るのが一番幸せなんだよ！」

それ見たことかにとりが割って入る。自分が肯定されたことが余程嬉しいのか小躍りすらしている。

「そりやそうだよ！ ここにいれば危ない目になんか遭わない。ご飯だってちゃんと私があげてる。欲しい物だって手に入る。ここから出る必要なんかないもんね！」

輝くようなにとりの問いかけに、リサは安心したような笑みで答えた。

頭の中で何かが弾ける。

「ただ生きてりや良いなんて誰が思うのよ！」

怒りに任せるまま叫ぶ。石みたいになっただにとりを無視して、上海人形が鉄柱を切り裂いた。驚愕の表情でにとりが何かを喚くが、もう耳に入らない。

「危ないことから遠ざかって、怪我しないように閉じこもって、何でもかんでも手に入って、自分じゃ何にも手にできなくて！」

隙間から檻の中に入る。服山の前まで来た。リサはその奥へ隠れて震えている。服を鷲掴みに投げ捨てて、そ

の姿を露わにさせる。

アリスの服を着た魔理沙似の少女は、この世の終わりが来たような怯えた表情でこちらを見上げている。

そんな顔はして欲しくなかった。

そんな顔はしたくなかった。

「——あんたそっくりな奴を知っているわ。そいつは自分可愛さに逃げ回って一番大切なものを失ったのよ!!」

びくりと震えてリサは目を閉じた。その首根っこを掴み、アリスは檻を出る。

「あ、ああっ！」

「あんたも来なさい！」

言葉を囁むにとりの腕を掴み、アリスは地下室から駆け出した。そのままの勢いで空を飛び、雲間を抜けてさらに高みへ。振り落とされぬよう必死なのか、か細い指先が背中を握りしめる。

誰に見られていようと、もうどうにでもなれと思う。

ただこれだけはしなければいけないという使命感が、身体を弾け飛ばす衝動となる。

息が枯れる。辛い。

汗が噴き出る。問題ない。

にとりを放る。おつかなびつくり彼女は飛んだ。

「見なさい」

酸っぱい唾を飲み込みながら、アリスは細い身体をゆする。浮遊感の恐怖からかりサは白い布に顔を押し付けていた。

震えている。

まるで弱虫の子猫だ。だけでも、それを笑う気にはなれなかった。

「見なさい」

もう一度、言う。

今度は優しく、子どもに語って見せるように。

ゆつくりと、本当にゆつくりと彼女は布から顔を離す。声にならない叫びをアリスは聞いた。

「これが世界よ」

果てに昇った太陽に照らされ、白い雲の地平がどこまでも広がっている。空の青さもここまで来ると薄くゆらぎ、白昼の月がこちらを眺めている。オーロラのような光の帯が地上に伸びている。にとりの家もここからでは豆粒ほどにも見えない。全てが遠く、果てしない。

「あの向こうには、まだ見えない世界があるのよ」

それは果たして誰に言った言葉だったのか。

リサからの答えは無い。

ただ汗ばんだ手が、力強く握りしめたことだけは覚えている。

終わってしまったえばやってやったという気持ちちが1割で、やってしまったという気持ちちが9割だった。

なりゆきのままあんなことをしてしまったが、冷静に戻ってみれば己の行動が途端に恐ろしくなる。自己満足に吐いた言葉に髪を引きちぎりたい。恥ずかしさに全身がむず痒い。にとりが出した濁った酒に手も付けず、アリスはため息ともあくびとも取れない呻きを上げ続ける。

「……あんな顔初めて見た」

酒器に口をつけながら、にとりはそうこぼした。

「え？」

「リサのあんな顔、初めて見たって言ったの」

半ばヤケのような口調でにとりは言う。

ぐいと酒を逆さにし、にとりは床に突っ伏した。まさか河童がこの程度で酔うはずもないが、にとりは泥酔の彼方にあるような瞳で床板に挟まったホコリを見つめて

### 【第三章 覆水不返】

いる。

「……私は間違っていたのかな」

ぐりぐりと床に額を擦りつけながらにとりはばやく。

「人間が好きなんだよお。妖怪が人間と一緒に居られないのもわかってるよお。でもさあ、きつとあの子は良いことなんか何にもなかったんだよ。美味しい物食べてさ、綺麗な服着てさあ。そういうのは幸せじゃないのかよお」

「——そうね」

にとりはにとりなりに考えて行動した。どれほどの頃から彼女と付き合っているかは知らないが、檻にでも閉じ込めねばならない時もあったのだろう。それに、一人はぐれた骨付き肉を逃すほどこの妖怪は甘くないし、人間をかくまうということが妖怪の山の一員として相当危ない橋なのも間違いないだろう。その行動を蔑む気にはアリスはなれなかった。

「もちろん、そういう幸せだってあるわよ。大抵の人間は美味しい物食べれば幸せになるし、綺麗な服も着たいと思うわよ。でも、彼女は」

言葉が濁る。頭の中の考えを表現する言葉が見つからない。酒に口を付ける。米を噛み続けたような甘い風味

が広がる。この時代にしては相当上物な酒なのかもしれない。

ぶはっ、と甘い息が出た。

「このまま檻の中に閉じこもったままで良いのかなって。この先、死ぬまでここに居て、それで」

酒の甘味に口が滑る。

「——自分はどこにいるのかなって」

不意に出た言葉はアリスにすら意図のわからないものだった。重い沈黙に押しつぶされるようにアリスは言葉を吐く。

「ごめんなさい。自分でもよくわかんなくなっちゃった」

「ううん。大丈夫だよ」

のっそりとにとりが起き上がる。

瞳が多少潤んで見えるのは光の加減か、酒のせいかな。

「きつと、リサはわかっているから。あんたが教えてくれた。あの子はちゃんと正しいことを選ぶよ」

「——そうね」

にとりが徳利を差し出す。アリスは白い酒を酒器で受け、代わってにとりに酒を注ぐ。

二人は無言で酒器を合わせ、ぐいと飲み干した。

「しかしそれでも別れは辛いのであった」

「我慢しなさい。人間は盟友なんでしょ？」

「盟友？ 私そんなこと言ったかな？」

途端、アリスの表情が固まる。

「……ごめん。違う奴が言ったんだわ。忘れて」

「そう？ でも盟友か。めいゆう。うん、それいいね」

口の中で飴でも舐めるようににとりはその響きを何度も舌の上で転がした。その様を複雑な表情で見つめながら、アリスはごまかすように酒を進める。

「何だかあんたとは初めて会った気がしないよ。もしかして前にどこかで会ったことある？」

「会ったことはないわね。会うことはあるけど」

「へ？」

「何でもないわ。さ、服を返してもらいましょうか」

「う。覚えてたか。——あ」

不意に思いだしたようににとりは頷く。

「もしかしてさ、あの箱もあんたのかい？」

「箱？」

にとりが指差した先には穴の開いたトランクがある。

それは紛れもなくアリスのものだった。

「……驚いた」

まさかこんな所にあるとは。

「最近山の中で拾ったんだよ。後ヘンテコな帽子も」

「そう。ありがとう。失くしたかと思ってた」

「ねえねえ。あの箱の中に何が入ってるんだい？ えらく頑丈だし、そのくせ穴なんて開いてるし」

「そうねえ」

興味津津に顔を覗き込むにとりに、アリスはいたずらっぽく言う。

「悪を挫く正義の巨人よ」



思えば記憶の始まりもこんな森の中だった。

年頃は二つか三つか。

恐らくは親たちと散歩にでも出たのだろう。くしゃくしゃと枯れ葉を踏む感触が楽しくて、ばんばんと両足で飛び跳ねて母に窘められた。小さな藁草履の感触を今でも覚えていて、傍を歩く父と母の草履の大きさに無性に憧れた記憶がある。

**続きは本編で**

